

# ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語の所有構造 周辺言語の影響とみられる特徴について

山越 康裕  
(札幌学院大学)

## 0. はじめに

中国およびロシアに分布するツングース系の民族集団ハムニガン (*KhM.&KhE. kamnigan*) は、モンゴル諸語の一つであるハムニガン・モンゴル語<sup>1</sup>とエヴェンキ語(ツングース諸語)の一方のハムニガン・エヴェンキ語<sup>2</sup>の二つの言語を使用するとされる (Janhunen 2003: 83).

この二つの言語は常に接触状態にある。そのため文法構造においてもいくつか接触の影響と思われる特徴が見受けられる。両言語の間ではハムニガン・モンゴル語が社会的に優勢な言語(H言語)と考えられており、接触の影響はL言語であるハムニガン・エヴェンキ語に顕著に確認される。ハムニガン・エヴェンキ語では、ハムニガン・モンゴル語からの自立語の借用ばかりでなく、疑問標識 =gu, 習慣分詞語尾 -dAg<sup>3</sup>, 2人称複数命令語尾 -gtui といった付属語、付属形式の借用も確認される。さらに動詞の否定表現に用いられる否定動詞の付属形式化といった、ハムニガン・モンゴル語もしくはモンゴル諸語からの影響と考えられる形態・統語構造の変化についても報告されている (cf. Janhunen 1991)。一方、ハムニガン・エヴェンキ語からハムニガン・モンゴル語への影響はあまり目立たない。もっとも接触の影響が明確にあらわれると思われる語彙借用についても、ハムニガン・モン

\* 本稿は日本語学会第133回大会(於札幌学院大学)での口頭発表「ハムニガン・モンゴル語とハムニガン・エヴェンキ語の所有構造に見られる言語接触の影響」を加筆・修正したものである。発表の際、呉人恵先生、風間伸次郎先生ほかから有益な助言をいただいたことに対し、ここで感謝の意を表したい。なお、本稿は平成12-14年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)「中国東北部およびロシア極東のツングース諸語に関する緊急調査」(代表 津曲敏郎)および平成17-18年度日本学術振興会科学研究費補助金特別研究員奨励費「中国東北部の消滅に瀕したモンゴル諸語の記述および言語接触にかんする研究」の助成を受けて実施した現地調査の成果の一部である。

<sup>1</sup> ハムニガン・モンゴル語はロシア連邦アガ・ブリヤート自治管区、中国内モンゴル自治区フルンボイル市陳バルガ旗エヴェンキ村などで使用される。Janhunen (1992) はウルルガ方言とマニコヴォ方言のふたつの方言を認めている。と同時に Janhunen (1992) は音韻面から系統的關係を分析し、ハムニガン・モンゴル語はモンゴル諸語の中のいかなる言語の下位方言にも属さない、孤立的なモンゴル諸語の一つと位置づけている。ロシア連邦内におけるデータが皆無であることから全体の話者数を述べることは困難だが、コンサルタントとして協力いただいたサルミン(Chi. 尚民)氏(30代女性)によれば中国には約1,500人程度のウルルガ方言話者がいるという。この人口はエヴェンキ村に暮らすハムニガンの人口にほぼ一致する。本稿におけるハムニガン・モンゴル語のデータは、特に記載のない限り筆者がサルミン氏からの聞き取り調査により得たものである。

ハムニガン・モンゴル語の音素目録は以下のとおり：母音 a, ɔ, o, ə, u, i, (e)；子音 b, (p,) t, d, k, g, s[s~ʃ], ʃ[ʃ], x, c[ts~tʃ], z[dz~dʒ], l, r, m, n, ŋ, j, (w)。p および w は借用語にのみあらわれる。また母音 e は二重母音 ee および長母音としてのみあらわれる。長母音は高低アクセントの分布から同一母音音素の連続ととらえる。

<sup>2</sup> ハムニガン・エヴェンキ語もハムニガン・モンゴル語と分布地域を同じくする。ウルルガ方言とボルジャ方言のふたつの下位方言がある。ハムニガン・エヴェンキ語はエヴェンキ語の一方の方言として分類できるという (Janhunen 1991: 13)。話者はハムニガン・モンゴル語に比べて少なく、中国では約1,000人と推測されている (Janhunen and Salminen 1993)。音素目録はハムニガン・モンゴル語に一致する(注1参照)。

<sup>3</sup> 母音調和による異形態を有する形態素については、交替する母音を大文字で示す。

ゴル語の基礎語彙の中にツングース諸語から借用されたと推測される単語は確認できない。しかし、ハムニガン・モンゴル語とその他の周辺のモンゴル諸語とを共時的に比較対照すると、ツングース諸語からの影響と考えられる特徴がいくつか観察される。本稿ではその一例として、ハムニガン・モンゴル語とハムニガン・エヴェンキ語の所有構造についてとりあげ、周辺のエヴェンキ語、ブリヤート語、モンゴル語<sup>4</sup>などと比較対照してその特徴をさぐる。具体的には、二つの名詞がそれぞれ所有者、被所有者の役割をになう名詞句(所有者#被所有者)を形成する際にどのような構造が好まれるのか、どのような標識をとるのかについて観察、分析していく。その結果、ハムニガン・エヴェンキ語には属格の存在や所有人称標識の非義務性にモンゴル諸語の影響が考えられること、一方でハムニガン・モンゴル語には所有人称標識の発達やその有無による譲渡可能性の区別などにツングース諸語の影響が考えられることを述べる。

### 1. 所有構造の種類

津曲(1992)にならい、Nichols(1986)の head-marking/dependent-marking の観点からハムニガン・モンゴル語およびハムニガン・エヴェンキ語の所有構造を分類すると、(1)の四つに区別される。ハムニガン・モンゴル語の用例とともに示す。

(1) 二重標示型(DH型) : 所有者 D-GEN#被所有者 H=POSS

akaa-g-ai juumən=ni  
 兄-E-GEN もの=3.POSS  
 「兄のもの」

主要部標示型(H型)? : 所有者 D#被所有者 H=POSS

∅ tarikin=mini  
 ∅ 頭=1SG.POSS  
 「私の頭」

従属部標示型(D型) : 所有者 D-GEN#被所有者 H

minii dəbtər  
 1SG.GEN ノート  
 「私のノート」

無標型? : 所有者 D#被所有者 H

bacagan duu  
 娘 弟妹  
 「妹」

ただし、両言語ともに無標型は慣用句や(1)の例のようになかば語彙化している例、も

<sup>4</sup> モンゴル語はモンゴル語チャハル方言の例を、ブリヤート語はシネヘン・ブリヤート語の例をそれぞれあげる。モンゴル語はナラントヤ氏(北海道大学大学院生; 30代女性)、シネヘン・ブリヤート語はドンドク氏(30代男性)、バヤスゴラン氏(20代男性)にそれぞれコンサルタントとしてご協力いただいた。ハムニガン・モンゴル語話者の尚民氏をはじめ、コンサルタントの皆様へ深い感謝の意を表したい。当然ながら本稿における不備や誤りに対する責任はすべて筆者にある。

しくは[材料#製品]という意味関係をなす形式(e.g. gal#tərgən「汽車(火#車<Chi. 火車)」; mōdn#gər「木造家屋(木#家)」, etc.)に限って用いられる。つまり積極的に所有関係を示しているとはいいがたい。そのため、本稿の対象から除く。

またハムニガン・エヴェンキ語およびモンゴル諸語には従属部があらわれず、主要部である被所有者に所有者の人称がマークされるタイプ(∅#被所有者 H=POSS)が存在する。(1)に例示したように、これはH型とも考えられる。しかし仮に所有者が明示されると仮定した場合、所有者名詞は属格であられる(所有者 D-GEN#被所有者 H=POSS)ことが予想されるため、厳密な意味でH型とは認めがたい。そのため、この形式を「疑似的なH型」= H'型(主要部標示/従属部欠如型)として設定する。

以上から、(1)から無標型を除き、H'型を加えた四つの構造の分布について、近隣のエヴェンキ語、モンゴル語、ブリヤート語と対照しつつ以下確認していく。

## 2. エヴェンキ語の所有構造

まずハムニガン・エヴェンキ語の所有構造をみる前に、当該言語の特徴を明確にするために、エヴェンキ語の所有構造について概観する。

ロシアで使用されるツングース諸語のひとつ、エヴェンキ語では(1)で示した三つの構造のうちH型がもっとも一般的とみられている(cf. Nichols 1986: 68)。また、D型を欠いており、被所有者(H)には常に所有者の人称がマークされる。(2)に示すように、DH型も確認される。例は省略するが、H型も存在することを付け加えておきたい。

(2) *Evk.* H型

ollomimni d<sup>h</sup>aw-in.  
漁師          ボート-3SG:POSS  
「漁師のボート」

DH型

atərkan-ŋi gərbi-n.  
老女-PSSR    名前-3SG:POSS  
「お婆さんの名前」

[Nedjalkov 1997: 158]

なお、DH型の所有者に接続する従属部標識の接尾辞-ŋi(異形態-ni)については、属格標識とみなす立場(e.g. Vasilevich 1958: 676)と派生接尾辞とみなす立場(e.g. Sunik 1982, 池上 1999: 346)とがある。所有者に接続すること、直後の被所有者との関係を示すことから属格をあらわす標識とみることに問題はなさそうである。しかし、次の2点から属格標識とはみなしがたい。

- 1) 接尾辞 -ŋi/-ni が義務的に接続する要素ではない。
- 2) 接尾辞 -ŋi/-ni が接続した形式は被所有者をとまなうことなく単独で用いられることが多い。

まず、接尾辞 -ŋi/-ni は義務的に接続する要素ではない点である。後に見るモンゴル諸語は、厳密な意味でのH型を欠いており、所有者が被所有者に先行する際に常に従属部標識(=属格)が要求される。それに対しエヴェンキ語では、Nedjalkov(1997: 158)の示す例(2)H型のように所有者が従属部標識(=接尾辞 -ŋi/-ni)をとまなわなくとも被所有者に先

行できる。つまり、文法範疇として認めるには体系的ではないということになる。

また、接尾辞 *-ŋi/-ni* が接続した形式は被所有者をともなうことなく単独で用いられることが多い。さらに D 型で所有構造をあらわすことができない。仮に *-ŋi/-ni* を属格と認めるとすると、他の名詞との関係を標示する機能をもつ必要がある。しかし単独で用いられたり、被所有者との関係を *-ŋi/-ni* のみで示すことができないという点で、関係を明示しているとはいいがたい。

以上の理由から、接尾辞 *-ŋi/-ni* を属格とみなすことには問題が残る。そのため池上(1999: 346)は接尾辞 *-ŋi/-ni* を「所有形容詞や所有代名詞をつくる接尾辞」ととらえている。

標識の定義にかんする上記のような問題は残るが、所有者が何らの標識もとらずに被所有者のみがマークされる H 型(および H'型)と、接尾辞 *-ŋi/-ni* を接続する DH 型とが両方とも存在することは確かである。これらの構造が存在し、かつ D 型を欠くということは、言い換えれば常に被所有者がマークされるということになる。

### 3. ハムニガン・エヴェンキ語の所有構造

一方、エヴェンキ語の下位方言と位置づけられるハムニガン・エヴェンキ語は異なる構造を有する。ハムニガン・エヴェンキ語には(3)に示すような D 型, DH 型, H'型の所有構造が確認される。エヴェンキ語との違いは H 型が確認されないこと, D 型が確認されることである。

(3) <i>KhE</i> . D 型		DH 型		H'型
<b>minnii</b>	<i>girki-l.</i>	<b>minnii</b>	<i>girki-l=bi.</i>	<i>girki-l=bi.</i>
1SG:GEN	友-PL	1SG:GEN	友-PL=1SG:POSS	友-PL=1SG:POSS
(いずれの構造も)「私の友人たち」				

[ Janhunen 1991: 71 ]

ハムニガン・エヴェンキ語についての先行記述は、エヴェンキ語の *-ŋi* に対応する *-ŋii/-nii* を属格接尾辞として記述している (e.g. Castrén 1856: 5, Janhunen 1991)。H 型が存在せず、所有者があらわれる場合常にこの接尾辞をともなうことから、属格と判断していると推測できる。

(3) D 型の例からもわかるとおり、ハムニガン・エヴェンキ語の場合、主要部に接続する所有人称標識は必須ではない。属格が発達し、主要部の人称標識が必須ではない点がエヴェンキ語との相違点である。

このほか、次にみるように譲渡可能接辞が消失している点と、所有人称標識の結合度が低下している点がエヴェンキ語と異なる。

#### a. 譲渡可能接辞の消失

ツングース諸語のうち、とくに現在のロシア領内に分布する諸言語には、譲渡可能物であることを示す標識(譲渡可能接辞)が主要部名詞に接続するという特徴がある。エヴェンキ語にも譲渡可能接辞が存在し、譲渡可能物には *-ŋi-* が接続する。

(4) *Evk.* uluki-**ŋi**-w.

リス-ALIEN-1SG

「私の（見つけた，追った，殺した etc.）リス」 [ Nedjalkov 1997: 145 ]

しかし Tsumagari (1997:180-181) が述べているように，ハムニガン・エヴェンキ語ではこの接辞は消失しており，確認されない (Tsumagari 1997: 180-181)。

b. 所有人称標識の結合度の低下

ツングース諸語の所有人称標識は，多くが接辞としてあらわれ，形態音韻規則にしたがった音変化がみられる．例えばエヴェンキ語南部方言では，-s ではじまる接辞が l, n で終わる語幹に接続する際に同化するという形態音韻規則がある．そのため，2 人称単数所有標識 -si は (5) のような異形態をもつ．

(5) 形態音韻規則 l-s > l-l; n-s > n-n による 2 人称単数所有標識の異形態

*Evk.* 表出形 ɔrɔn-**ni**.

基層形 ɔrɔn-**si**

トナカイ-2SG.POSS

「お前のトナカイ」 [ Nedjalkov 1997: 143 ]

一方，Janhunen (1991: 72) が指摘するように，ハムニガン・エヴェンキ語の所有人称標識は形態音韻規則の適用を受けない．ハムニガン・エヴェンキ語にもエヴェンキ語南部方言の形態音韻規則に対応して，-s はじまりの接辞が l, n 終わりの語幹に接続する際に s > d に変化するという規則がある．たとえば 2 人称述語標識の -si は，この規則に従い -di とし てあらわれる．

(6) *KhE.* : 形態音韻規則 {n, l}-s > {n, l}-d

*KhE.* baka-**ndi**.

\*baka-n-**si**

見つける -PTCP-2SG

「お前は見つける」 [ Janhunen 1991: 82 ]

しかし，所有人称標識はこの規則の適用を受けない．2 人称所有標識は述語人称標識と同じ si という音形だが，同環境でも si のままあらわれる．

(7) *KhE.* : 形態音韻規則 {n, l}-s > {n, l}-d

*KhE.* girki-l=**si**.

友-PL=2SG.POSS

「お前の友人たち」 [ Janhunen 1991: 72 ]

以上のように，エヴェンキ語との比較において，ハムニガン・エヴェンキ語の所有人称

標識は形態音韻規則を受けず (7), かつ必須要素ではない (3). つまり所有人称標識は名詞との結合が弱まっており, 形態音韻規則の適用を受けない倚辞に変化していると強く推測される<sup>5</sup>.

#### 4. ハムニガン・モンゴル語の所有構造

続いてハムニガン・モンゴル語の所有構造について概観する. ハムニガン・モンゴル語も, ハムニガン・エヴェンキ語同様 D 型, DH 型, H'型の三つの型が確認される. H'型は所有者が 1, 2 人称であることが多い. もっとも頻繁にあらわれるのが DH 型である.

(8) <i>KhM.</i> D 型		DH 型		H'型
<b>minii</b> dəbtər.		<b>minii</b> akaa= <b>mini</b> .		tarikın= <b>mini</b> .
1SG:GEN ノート		1SG:GEN 兄=1SG:POSS		頭=1SG:POSS
「私のノート」		「私の兄」		「私の頭」

たとえば「A の B の C」のように所有構造が二重になっている場合にも, 次のような DH 型があらわれる点が特徴的である. 次節でみるシネヘン・ブリヤート語や近隣の他のモンゴル諸語では, DH 型が主題位置に限ってあらわれうるが, ハムニガン・モンゴル語では「主題」ではない要素でも DH 型があらわれる.

(9) <i>KhM.</i> ənə=cini	<b>minii</b>	akaa-g-ai= <b>mini</b>	juumən= <i>ni</i> .
これ=2SG:POSS	1SG:GEN	兄-E-GEN=1SG:POSS	もの=3:POSS
「これは私の兄のものです。」			

さらに所有者が人間の場合, 被所有者の意味と所有構造とのあいだに相関関係がみられる. (10) は山越 (2007a) から用例を抽出したもので, [(所有者) #被所有者] の所有構造をなす名詞句のうち, 「所有者 = 人間」となっている例の被所有者の意味を列挙したものである.

#### (10)

D 型: juumən 「もの」, dəbtər 「ノート」, zakidal 「手紙」, boroo 「過失」

DH 型: 身体 (gar 「手」, tarikın 「頭」)

身体属性 (kəl 「言葉」, turhən on sar 「生年月」)

衣服 (cag 「腕時計」, malagai 「帽子」)

親族名称 (aba 「父」, akaa 「兄」, əgəci 「姉」, duu 「弟妹」, bacagan duu 「妹」,

xamgan 「妻」, kubuun 「息子」, kuu 「息子」, kuuged 「子ども」, aci kubuun

<sup>5</sup> 山越 (2003: 164) で「母音調和に『語』の絶対的基準を求めることはできない」と指摘したのと同じく, 形態音韻規則が適用されるか否か倚辞の判断基準とすることについてはさらに検討する必要がある. ただし, 形態音韻規則の適用 / 非適用が「語」の類型的音韻パラメータとしてあげられているように (e.g. Aikhenvald 2002), 形態音韻規則の適用が結合度をはかる指標となっていることについては類型論の立場からみて問題ないと考えられる.

「孫」)

その他 (gər 「家」, turhən gazar 「故郷」, kursi ailnood 「近所の家」, juumən 「もの」)

H'型: 身体 (bəjən 「体」, zurkin 「心臓」, tarikin 「頭」, cirai 「顔」, gar 「手」)

身体属性 (ubcin 「病気」, noir 「眠気」, ner 「名前」, naxon 「年齢」)

衣服 (kobcaxon 「服」, malgai 「帽子」, colkin 「靴下」, umdən 「ズボン」)

親族名称 (aba 「父」, ezii 「母」, akaa 「兄」)

その他 (azil 「仕事」, nukur 「友人」, əŋkə 「エンケ (人名)」, juumən 「もの」)

D型は全体的に使用例が少ない。また所有人称標識が接続しているH型, DH型の被所有者は, D型に比べてより所有者と密接な関係にある語彙であることが多い。角田(1992: 119)は, 所有者と被所有者とがどの程度密接な関係にあるかをもとに階層化した「所有傾斜」を示している。H型, DH型の被所有者は, その階層の上位に分類される名詞であることが多い。

なお, 所有人称標識はそのアクセント分布から倚辞と判断される。山越(2003)で扱ったシネヘン・ブリヤート語の場合同様, 付属形式がhostのアクセント移動を引き起こせば接辞, 引き起こさなければ倚辞と仮定した場合, 所有人称標識はアクセント移動を引き起こさないことから倚辞と判断できる<sup>6</sup>。

#### 5. シネヘン・ブリヤート語の所有構造

ハムニガンと密接な関係にあるブリヤートの使用するシネヘン・ブリヤート語<sup>7</sup>も, ハムニガン・モンゴル語同様D型, DH型, H型の三つの構造が確認される。

(11) Shi. D型		DH型		H'型
s <sup>h</sup> iinii	suumxe.	s <sup>h</sup> iinii	suumxe=s <sup>h</sup> ni.	suumxe=s <sup>h</sup> ni.
2SG:GEN	カバン	2SG:GEN	カバン=2SG:POSS	カバン=2SG:POSS
(いずれの構造も)「お前のカバン」				

ただしDH型はハムニガン・モンゴル語ほど多用されない。しかも, DH型は所有構造をなす名詞句が文の主題としてとりたてられている場合に限ってあらわれる。シネヘン・ブリヤート語は名詞句の語順が比較的自由に, 主題となる名詞句が文頭に置かれる傾向にある。主語名詞句が主題となっている例(12), 目的語句が主題となっている例(13)をあげ

<sup>6</sup> アクセントにかんしては山越(2007b: 233)に示したとおりである。1人称単複, 2人称単複の所有人称標識が接辞であるとする, hostの高低アクセントが移動し, 所有人称標識初頭の母音直後にアクセントの下がり目がくるはずだが, 実際にはhostの高低アクセントは移動せず, 単独形と同じ位置に下がり目が確認される。

<sup>7</sup> ロシア領内におけるハムニガンの居住地域は, ブリヤートの居住地域と重なっている。また, 中国領内に暮らすハムニガンおよびブリヤート(シネヘン・ブリヤート)は, ロシア革命以降ロシア(ソビエト連邦)からともに亡命した経緯をもつ。現在, シネヘン・ブリヤート語とハムニガン・モンゴル語, ハムニガン・エヴェンキ語の使用地域は重なっていないが, シネヘン・ブリヤートの居住地域(内モンゴル自治区フルンボイル市シネヘン川流域)にはシネヘン・ブリヤート語を母語とするハムニガンも数百人暮らししており, かつてブリヤート語とハムニガン・モンゴル語(およびハムニガン・エヴェンキ語)とが恒常的な接触状態にあったことが強く推測される。

る .

- (12) *Shi.* s<sup>j</sup>inii hamga=s<sup>j</sup>ni x<sup>j</sup>atad-aar jar<sup>j</sup>-z<sup>j</sup>a s<sup>j</sup>ad-xa=go.  
2SG:GEN 奥さん=2SG:POSS 中国の-INS 話す-CVB.IPFV できる-FUTP=Q  
「(他の人はさておき,) お前の奥さんは中国語を話せるか?」

[ 山越 2006: 142 ]

- (13) *Shi.* minii s<sup>j</sup>aarpa-jii=mni xaana tab<sup>j</sup>-aa=ta.  
1SG:GEN マフラー-ACC=1SG:POSS どこに 置く-IPFVP=2PL  
「ぼくのマフラーはどこに置きましたか?」

このとき別の名詞句が文頭に置かれると, 所有構造をなす名詞句は DH 型であらわれることができなくなる .

- (14) *Shi.* \*ez<sup>j</sup>ii=mni minii s<sup>j</sup>aarpa-jii=mni ugui-s<sup>j</sup>x<sup>j</sup>-oo.  
母=1SG:POSS 1SG:GEN マフラー-ACC=1SG:POSS ない-IPFV-IPFVP  
「お母さんがぼくのマフラーをなくしちゃった .」

(13) では目的語名詞句である「ぼくのマフラー」が DH 型であらわれているが, (14) では DH 型は許容されない . 所有構造を D 型で示すか, 目的語名詞句が文頭に置かれることで許容される .

- (15) *Shi.* ez<sup>j</sup>ii=mni minii s<sup>j</sup>aarpa-jii ugui-s<sup>j</sup>x<sup>j</sup>-oo.  
母=1SG:POSS 1SG:GEN マフラー-ACC ない-IPFV-IPFVP  
「お母さんがぼくのマフラーをなくしちゃった .」

- (16) *Shi.* minii s<sup>j</sup>aarpa-jii=mni ez<sup>j</sup>ii=mni ugui-s<sup>j</sup>x<sup>j</sup>-oo.  
1SG:GEN マフラー-ACC=1SG:POSS 母=1SG:POSS ない-IPFV-IPFVP  
「ぼくのマフラーはお母さんがなくしちゃった .」

これらの例から判断すると, シネヘン・ブリヤート語では, 主題を際立たせるために DH 型が用いられていると推測できる . 後述するモンゴル語の場合, 所有人称標識が直前の名詞句を強調する機能を持つとみられている (e.g. 小沢 1986: 106) . おそらくシネヘン・ブリヤート語も同様に, DH 型における所有人称標識が人称・数を標示する機能を保ちつつも, 実質的には共起することで host を強調していると推測される . DH 型の使用条件が限定されるため, (9) のような二重の所有構造においても DH 型にはならない . (17) は (9) の表現をそのままシネヘン・ブリヤート語であらわしたもののだが, 二重の DH 型は非文と判断される . この場合, D 型によってそれぞれの所有関係を示すのが適当であるという .





(20) *Mon.*    **minii**      debter=**cin**            xaana      bai-na=be.  
                  1SG:GEN   ノート=2SG:POSS   どこ      ある-PRS=Q  
                  「私のノートはどこですか？」

むしろ一致した場合、つまり (20) を DH 型で表現すると非文と判断される。先行する人称代名詞属格形を除くか、後続する 1 人称単数所有標識を除くことで適当な表現となるという。

(21) *Mon.*

DH 型    \***minii**      aab=**min**            ix            cadal-tee    xun      bai-san.  
                  1SG:GEN   父=1SG:POSS   大いに      能力-COM   人      いる-PFVP

H 型      aab=**min**            ix            cadal-tee    xun      bai-san.  
                  父=1SG:POSS   大いに      能力-COM   人      いる-PFVP  
                  「私の父はとても偉大だった。」

D 型      **minii**            aab    ix            cadal-tee    xun      bai-san.  
                  1SG:GEN   父    大いに      能力-COM   人      いる-PFVP  
                  「私の父はとても偉大だった。」

一致をむしろ避けるという現象をみると、(19) の例が果たして実際に一致している、つまり DH 型であらわれているとはいいがたい。梅谷 (2003: 216) はこうした DH 型の場合の所有人称標識が所属 (= 所有) の意味をあらわさないとしている。ということは、2 人称単数や 3 人称の所有人称標識は、ハムニガン・モンゴル語やシネヘン・ブリヤート語のように積極的に所有関係を標示しているとはいえないということになる。つまり、厳密な意味での DH 型は存在しないといえる。

所有人称標識が人称標示の機能と焦点化の機能とをあわせもつことに加え、現在のモンゴル語では 1, 2 人称複数所有標識の使用頻度が (対応する人称代名詞と比較しても、1, 2 人称単数・3 人称所有標識と比較しても) 低い<sup>8</sup>。つまりモンゴル語では DH 型の所有構造は存在せず、また H 型についても生産的ではないということになる。結果として、モンゴル語の所有構造は D 型によってあらわされるのが一般的だとまとめられよう。

#### 7. 各言語の所有構造の類型と接触による影響の可能性

以上ハムニガン・エヴェンキ語、ハムニガン・モンゴル語に加え、エヴェンキ語、シネヘン・ブリヤート語、モンゴル語における所有構造の分布をまとめると次表のようになる。

<sup>8</sup> 梅谷 (2003: 212) によれば、2 人称複数所有標識は日常的な会話にも用いられる。さらに梅谷 (ibid.) は、2 人称複数所有標識の使用頻度は 2 人称単数所有標識に比べて低く、頻繁には用いられないことも指摘している。

表. 各言語の所有構造のあらわれ

	D 型	DH 型	H'型	H 型
<i>Evk.</i>	×	○	○	○
<i>KhE.</i>	○	○	○	×
<i>KhM.</i>	○	○	○	×
<i>Shi.</i>	○	○×*	○	×
<i>Mon.</i>	○	×	○×**	×

\*被所有者が主題となる場合に限られる． \*\*D型に比べ頻度は低く、人称によっても差異がある．

ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語は、三つのタイプが併存しているという点で周辺に分布する近縁の言語と異なる特徴をみせる．とくにロシアのツングース諸語の典型的な所有構造である H 型をハムニガン・エヴェンキ語がもたず、その一方で属格を有する点が注目になる．以下、ハムニガン・エヴェンキ語とハムニガン・モンゴル語のそれぞれについて、周辺言語の接触の可能性について述べる．

#### 7.1 ハムニガン・エヴェンキ語にみられるモンゴル諸語の影響

ハムニガン・エヴェンキ語とエヴェンキ語の所有構造の相違点は次のとおりである．

- 1) 属格の存在
- 2) 譲渡可能接辞の消失
- 3) 所有人称標識の統合度の低下

ツングース諸語で属格を有する言語にはハムニガン・エヴェンキ語以外に満洲語、シベ語、ソロン語などがある．ソロン語は満洲語、シベ語とは系統的に遠い関係<sup>9</sup>にあると考えられているが、これらの言語はモンゴル諸語との接触が顕著だという共通点をもつ．これらの言語に属格が存在するのはモンゴル諸語の影響であると考えるのが妥当であろう．すでに池上（1999: 347）、田村（1992: 170）といった先行研究でも、満洲語などに属格が存在するのはモンゴル語の影響であることが示唆されている．このことから、満洲語やソロン語と並行した特徴をみせるハムニガン・エヴェンキ語についても、モンゴル諸語の影響によって属格が存在していると推測できる．この場合、ハムニガン・エヴェンキ語母語話者にとってもっとも接触の大きい、ハムニガン・モンゴル語の影響とみるのが適当といえる．なお、満洲語、シベ語、ソロン語などにも H 型が確認されないことから、属格の存在と H 型の不在は相関関係があるということも強く推測される．

また、満洲語、シベ語、ソロン語は、譲渡可能接辞がないという点においてもハムニガン・エヴェンキ語と共通している．この属格の存在は譲渡可能接辞の消失にも関係があると考えられる．Nichols（1988: 578）は「主要部標示型の言語では一貫して譲渡可能性の区別が存在する」と主張している．そのため典型的な H 型といえるロシアのツングース諸語には譲渡可能接辞が用いられているが、属格（=D 型）が用いられることによって、譲渡可能 / 不可能をそれぞれ D 型、H 型で弁別するようになり、譲渡可能接辞が不要となった

<sup>9</sup> ツングース諸語の系統的分類をこころみた池上（2001）によれば、満洲語およびシベ語は他のツングース諸語からもっとも古い時代に分岐した IV 群に分類される．一方のソロン語は I 群に分類されており、満洲語、シベ語から直接枝分かれした言語ではないとみられている．

と思われる。津曲（1992: 277）が満洲語とソロン語の属格と譲渡可能接辞の消失の関連を示唆しているように、ハムニガン・エヴェンキ語についても同様の関連が考えられる。

そして、ハムニガン・エヴェンキ語にみられた所有人称標識の統合度の低下も、モンゴル諸語の影響ではないかと思われる。類似の現象が上述の満洲語、シベ語、ソロン語にも確認されるためである。たとえば満洲語では所有人称標識が消失している。シベ語では3人称の所有人称標識のみが残存し、それが人称標示の機能を残しつつも定性やとりたてを示す標識として用いられている（木村 2005）。またソロン語ではモンゴル諸語やハムニガン・エヴェンキ語と同様、所有人称標識が非義務的な要素となっている。被所有者に所有人称標識が接続している例(22)と、接続していない例(23)をあげる。所有者を斜体、被所有者を太字で示す。

(22) *Sol. fini*      **gəbbi-fi**    awʊ    gu-nəŋ.<sup>10</sup>  
2SG.GEN 名前-2SG 何      という-3.PRS  
「お名前を何というのですか」

[朝克・津曲・風間（1991:17）]

(23) *Sol. bəjə-ni*    **dəuxi**    gu-nən.  
人-GEN 腸骨      という-3.PRS  
「人の腸骨だという」

[風間・トヤー（2007:41）]

接辞のように語内部の要素であれば、その要素のみが消失したり、脱落するということは考えにくい。その前段階として統合度の低下、つまり倚辞化が起こり、その後消失や脱落が起こったとみるのが妥当だろう。このように統合度が低下した原因には、近隣のモンゴル諸語の所有人称標識の統合度が低いことが関連していると考えられる。

ツングース祖語において属格が存在し、中国側の言語に残存しているのか、それとも発生的なものであるかについては議論の余地が残されている<sup>11</sup>。しかし属格の存在と所有人称標識の統合度の低さは同言語と恒常的に接触のあったハムニガン・モンゴル語、ブリアート語と同じ特徴である。ハムニガン・モンゴル語やブリアート語などのモンゴル諸語がハムニガン・エヴェンキ語の現在の属格のふるまいに影響を与えていることは大いに考えられる。

## 7.2 ハムニガン・モンゴル語にみられるツングース諸語の影響

ハムニガン・モンゴル語と近隣のモンゴル諸語との相違点は次のとおりである。

- 1) DH 型の多用
- 2) D 型 vs. H 型, DH 型の使い分け

<sup>10</sup> 表記は原典に従う。グロス・分析は筆者による。

<sup>11</sup> ツングース諸語の分類（池上 2001）における 群（エヴェン語）と 群（ウルチャ語、ウイльта語南方言）の1, 2人称代名詞に属格とみられる形式が確認されることから、風間（2003: 276）はこうした属格にあたる要素がツングース祖語にあったと推測している。このことから名詞の属格も並行して存在した可能性も考えられる。

他の近隣のモンゴル諸語と比べた際の、もっとも顕著な相違が DH 型の多用といえる。モンゴル語では DH 型を認めがたく、シネヘン・ブリヤート語では統語上、もしくは談話構造上の制約があるのに対し、ハムニガン・モンゴル語は統語上の制約なく DH 型が用いられる。周辺諸言語で同様に DH 型を発達させているのはツングース諸語に限られる。しかも明確に属格と所有人称標識が存在するのはハムニガン・エヴェンキ語のみであることから、ハムニガン・エヴェンキ語の影響によると考えるのが妥当であろう。

また D 型と H'、DH 型の使い分けも注目に値する。被所有者が所有者にとってより密接なかかわりがある場合、つまり「所有傾斜」の上位に分類される名詞ほど H' 型、DH 型で表現される傾向が強いことを確認した。ツングース諸語の譲渡可能接辞は、「所有傾斜」下位に分布する名詞に接続する傾向があり、上位の名詞には接続しにくい。ハムニガン・モンゴル語における H' 型、DH 型の被所有者は、ツングース諸語における譲渡可能接辞が接続しにくい名詞とほぼ一致する。つまり、ツングース諸語では譲渡可能接辞の有無が譲渡可能 / 不可能を区別する標識となっているのに対し、ハムニガン・モンゴル語ではその区別を [±POSS] によって代用しているということになる。

さらにハムニガン・モンゴル語では人間以外の所有者の場合はこうした傾向があらわれない。ツングース諸語でも譲渡可能 / 不可能の区別は人間が所有者の場合のみ関与することが指摘されており (Sunik 1947: 447)、これも同じ特徴を示す。

なお、主要部標示が譲渡不可能を示すという特徴は、類型的にも普遍的傾向として指摘されている (Nichols 1986: 77)。これも [±POSS] が譲渡可能性に関与していることをつよく支持する傾向といえよう。

モンゴル諸語にそもそもこうした譲渡可能性の区別があったのかどうかについては、通時的分析をおこなう必要がある。しかしシネヘン・ブリヤート語やモンゴル語からはこうした明確な区別はない。共時的にみて、近隣ではハムニガン・モンゴル語につよくその傾向がみられるということは、ハムニガン・モンゴル語が接触状態にあるハムニガン・エヴェンキ語の影響によるものとみるのが妥当である。

## 8. おわりに

以上みてきたように、7 で示したいくつかの特徴に対して、ハムニガン・エヴェンキ語、ハムニガン・モンゴル語がともに何らかの影響を及ぼしあっていることがつよく推測される。ハムニガン・エヴェンキ語のほうが属格の発達や譲渡可能接辞の消失などの形態的な変化をより大きく受けており、ハムニガン・モンゴル語はどちらかといえば譲渡可能性や所有人称標示といったツングース諸語に顕著な概念が形式に反映された、いわば「間接的な」影響を受けているといえよう。

なお、ハムニガン・モンゴル語とハムニガン・エヴェンキ語とではハムニガン・モンゴル語が優勢言語 (=H 言語) とされる (e.g. Janhunen 1991)。このことは、ハムニガン・エヴェンキ語にモンゴル系の語彙が多数借用されているのに対し、ハムニガン・モンゴル語にツングース系の語彙が確認されないことから明らかである。しかしそのような関係にありながら、間接的であるにせよ、L 言語であるハムニガン・エヴェンキ語が H 言語であるハムニガン・モンゴル語に何らかの影響を与えていることは注目に値する。

ブリヤート語の述語人称標示や所有人称標示の多用がツングース諸語の影響と考えられる (cf. 松本 2005) ことなどと同様, L 言語>H 言語という影響の方向はどの程度許容されるのか, その際に接触言語との類型的類似性は関連するのか, といった点について今後より詳細に分析する必要があると考える。

#### 言語名略号

Bur.:ブリヤート語, Evk.:エヴェンキ語(南部方言), KhE.:ハムニガン・エヴェンキ語, KhM.:ハムニガン・モンゴル語, Mon.:モンゴル語, Shi.:シネヘン・ブリヤート語, Sol.:ソロン語。  
グロス略号

1, 2, 3:人称, ACC:対格, ALIEN:譲渡可能, COM:共同格, CVB:副動詞, E:挿入音, FUT:未来, GEN:属格, INS:造格, IPFV:不完了, PFV:完了, PL:複数, POSS:所有, PRS:現在, PSSR:所有者, PST:過去, PTCP,...P:分詞, SG:単数, Q:疑問。

#### 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2002 Typological Parameters for the Study of Clitics, with Special Reference to Tariana. In: R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Word: A Cross-Linguistic Typology*. Cambridge, Cambridge University Press: 42-78.
- Castrén, M. Alexander 1856 *Grundzüge einer tungusischen Sprachlehre nebst kurzem Wörterverzeichnis* (Nordische Reisen und Forschungen 9), herausgegeben von Anton Schiefner, St. Petersburg, Kaiserliche Akademie der Wissenschaften.
- 朝克・津曲敏郎・風間伸次郎 1991 『ソロン語基本例文集』北海道大学文学部。
- 池上二良 1999 「満洲語とツングース語：その構造上の相違点と蒙古語の影響」『満洲語研究』: 344-358, 東京, 汲古書院 (初出: 『東方学』 58: 143-153. 1979年)。
- 2001 Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. 『ツングース語研究』東京, 汲古書院: 395-397 (初出: *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*: 271-2, Berlin, Akademie-Verlag. 1974年)。
- Janhunen, Juha 1990 *Material on Manchurian Khamnigan Mongol*. (Castrenianumin toimitteita 37) Helsinki, The Finno-Ugrian society.
- 1991 *Material on Manchurian Khamnigan Evenki*. (Castrenianumin toimitteita 40) Helsinki, The Finno-Ugrian society.
- 1992 On the Position of Khamnigan Mongol. *Journal de la Société Finno-Ougrienne*. 84: 115-143.
- Janhunen, Juha and Tapani Salminen 1993 *UNESCO Red Book on Endangered Languages: Northeast Asia*. <URL. [http://www.helsinki.fi/~tasalmin/nasia\\_index.html](http://www.helsinki.fi/~tasalmin/nasia_index.html)>
- 風間伸次郎 2003 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク, モンゴル, ツングース)及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのか: 対照文法の試み」アレキサンダー・ポピン, 長田俊樹共編 『日本語系統論の現在』(日文研叢書 31): 249-340, 京都, 国際日本文化研究センター。
- 風間伸次郎, トヤー 2007 『ソロンの民話と伝説 1』(ツングース言語文化論集 37) 北海道大学大学院文学研究科。

- 木村滋雄 2005 「シベ語の名詞接尾辞 -ni について」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』12: 175-184.
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil 1996 *Mongolian Grammar*. Hongkong, Jenco.ltd.
- 松本亮 2005 「エヴェンキ語, ヤクート語及びブリヤート語における人称接辞を伴う副動詞形について」『京大言語学研究』24: 153-184.
- Nedjalkov, Igor 1997 *Evenki*. London and New York, Routledge.
- Nichols, Johanna 1986 Head-marking and Dependent-marking Grammar. *Language*. 62(1): 56-119.
- 1988 On Alienable and Inalienable Possession. In: William Shipley (ed.) *In Honor of Mary Haas: From the Haas Festival Conference on Native American Linguistics.*: 557-609, Berlin, Mouton de Gruyter.
- 小沢重男 1986 『モンゴル語四週間』増補版. 大学書林.
- Sunik, O. P. 1947 O Kategorii Otchuzhdaemoi Neotchuzhdaemoi Prinadlezhnosti v Tunguso-manchzhurskix Jazykax. *Izvestija AN SSSR, Otdelenie Literatury i Jazyka*. tom 6/vyp 5: 437-451.
- 1982 *Suschestvitel'noe v Tunguso-man'chzhurskix Jazykax : v Sravnenii s Drugimi Altajskimi Jazykami*. Leningrad, AN SSSR.
- 田村建一 1992 「ツングース語の属格表現」『言語研究』101: 169-170.
- 津曲敏郎 1992 「所有構造と譲渡可能性: ツングース語と近隣の言語」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』: 261-278, 東京, 三省堂.
- Tsumagari, Toshiro 1997 Linguistic Diversity and National Borders of Tungusic. In: Hiroshi Shoji and Juha Janhunen (eds.) *Northern Minority Languages: Problems of Survival*. (Senri Ethnological Studies 44): 175-186, Osaka, National Museum of Ethnology.
- 角田太作 1992 『世界の言語と日本語』東京, くろしお出版.
- 梅谷博之 2003 「モンゴル語の二人称所属小辞」『東京大学言語学論集』22: 209-232.
- Vasilevich, G. M. 1958 *Evenkiisko-Russkii Slovar'*. Moskva, Gosudarstvennoe Izdatel'stvo Inostrannyx i Nacional'nyx Slovari.
- 山越康裕 2003 「モンゴル諸語の 'particle' について: シネヘン・ブリヤート語の事例から」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』11: 151-177.
- 2006 「シネヘン・ブリヤート語テキスト: 日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』13: 139-180.
- 2007a 「ハムニガン・モンゴル語テキスト: 日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』14: 145-184.
- 2007b 「ハムニガン・モンゴル語」中山俊秀・山越康裕編『文法を描く: フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』2: 229-258.

Khamnigan Evenki-go to Khamnigan Mongol-go no shoyuu koozoo: Shuuhén gengo  
no eekyoo to mirareru tokuchoo ni tsuite

Yasuhiro YAMAKOSHI  
(Sappari Gakkari University)

Khamnigan Evenki-go to Khamnigan Mongol-go no shoyuu koozoo ha doo natte iru no ka wo shirabete mitayo. Demo kore, 4nen mae ni Gengo Gakkai de happyoo shitakiri hootte oita ronbun dakara jibun demo konna koto kaite ii no ka wakaranai yo. Go-hihan, go-shiteki no hodo 4649 onegai shimasu.